

第 79 回補遺 「田町」地名考—松江市街地内での名称成立についての一視点

『松江市史』通史編「近世Ⅰ」の口絵に掲載する松江城下町図について議論をしていた頃だった。地名・町名は様々な時代の様々な要因で名付けられ、今日まで続くものもあれば、改変されて消えてしまうものもある。ふと、口絵の城下町図に記載する町名由来が気になって、田町生まれ、幼・小・中・高・大と田町の自宅から通い、現在も田町に住むK女史に、田町の名称由来を聞いてみた。言葉に詰まりながらも、以前は田圃があったから「田町」というようになったと聞いたことがある、との返事だった。

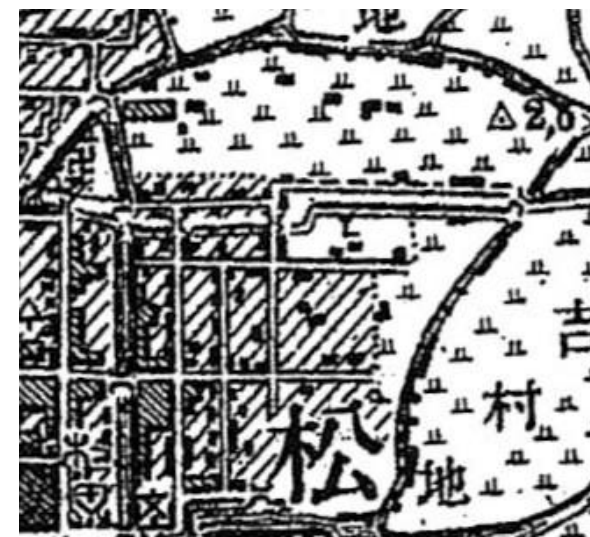
現在は市街地として、宅地が広がる田町であるが【写真 1】、昭和 22 年（1947）米軍撮影の航空写真を見ると、田畑（写真からは田と畑の区別はつきにくい）が広がっている【写真 2】。また、明治 32 年（1899）に大日本帝国陸地測量部が測図した地形図を見ると、北田町の大部分が田畑のマークで示され、南田町の一部にも田畑のマークが見られる【写真 3】。確かに、語られるように、田町には「以前は田圃があった」のは間違いない。しかし、近世の史料に「田町」の町名は記されているし、城下町絵図を見る限り、田町は武家地となっており、明治時代以降の地図や写真に見るように田畑が一面に広がっていたとは考えにくい。



【写真 1】田町航空写真（国土地理院、2009）



【写真 2】田町航空写真（米軍撮影、1947）



【写真 3】1/50000 地形図（田町）（大日本帝国陸地測量部、1899）

「雲陽大数祿」（史料編「近世I」）に、「古老云、今二ノ丸より奥谷赤山へつゞき、是を宇賀山といふ、城を築かん為赤山を断切川となし、陽山とし、此土を以て田町等の泥沢を埋め、地形をなすと云なり」と記されたように、城下町の造成にあたっては、松江城山（亀田山）の北にあった宇賀山を削り、堀にして、その開削土（山土）で低湿地の田町などを埋めたとの伝承が近世には既にあったようである。近年の発掘調査により、実際にこの山土が造成土として確認されたのは、殿町から母衣町の限られた屋敷地のみであったが、松江城下町遺跡（母衣町一八〇-二八・二九外）（北田町四八-一外）では、水田の畦や耕作面に残る足跡などが検出され、母衣町や北田町周辺一帯に水田の広がりを想定することができるようになった【写真4】。



【写真4】堀尾期松江城下町絵図（田町部分）（島根大学附属図書館蔵）

つまり、「田町」の名称由来は、近代以降、田町に田畑が広がっていたという事実からではなく、堀尾氏による城下町形成以前の景観から、「田町」の町名がつけられたと考えるほうがよさそうである。気づいてみれば、当たり前のことかもしれないが、松江城下町域で現在も使われる地名・町名は、堀尾氏による城下町形成時に由来するものもあることを念頭に置く必要があるのだろう。

ちなみに、岡田射雁（建文）が明治39年（1906）4～5月に「松陽新報」に「千鳥城と其城下」と題し連載した、「千鳥城の築造とその城下」（史料編『松江城』）には、「土屋敷の荒廃現状／彼の維新の際までは、宏壮なる門塀、玄関又は御成門等を構へたる諸家老の邸宅の為に、輪奐の

美を尽されたる南殿町乃至北殿町を始めとして、母衣町、南北田町、北堀、内中原、外中原等の土屋敷地は、維新後士族の零落にともなひて、明治十年前後より次第に荒廃に帰し、多くは水田桑圃に変じて、人をして禾黍油々の嘆あらしめ、偶々家屋を存するものあるも、多くは旧時の宏壯を捨て、陋隘卑狭の粗屋と変じ、又些少の旧時の盛容を忍ぶの觀なし。概観するに、現時の松江は、文明的形質の幾分を輸入したりと雖も、維新前の盛容には若かざる事遠しといふべし。」という記事が記されている。

(歴史まちづくり部次長／稲田信／令和2年1月15日記)

(第79回：『松江市史』から読み解く「大橋川」と「大橋」の名称由来(上)／(下)も参照)